

2021年4月11日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 17章 1～5節

説教題：永遠の命

しばらく前、近所にお住いの方から「母の葬儀をして頂けないでしょうか」とご依頼があり、司式をさせていただきました。亡くなられたお母様(Kさん)は、クリスチャンではありませんでしたが、数年前に召天されたKさんのお母様が熱心なクリスチャンで、Kさんのために祈りを積み上げておられたようです。またKさんご自身が、キリスト教式の葬儀を望んでおられたということも伺いました。また、これは告別式の参列者の方から伺ったことですが、Kさんは、一時期、教会に通っておられたようです。いずれにしても私は、Kさんと神様との繋がりを知り、感じ、イエス様の隣れみにすがって、「永遠の命」、「天の御国」について、その希望をお話することが出来ました。ご遺族の方々も、目を天に向けて下さった様子でした。死は悲しいです、地上の別れは辛いです。しかし、その中であって、「永遠の命」という希望をお話し出来ることの幸いを思いました。イエス様の十字架と復活を感謝しましたし、1人でも多くの方に「永遠の命」をご自分のものにして頂きたいと、改めて思ったことでした。

さて、少し「ヨハネ福音書」を休みましたが、また17章から学びます。イエス様は、告別の説教で、目の前に迫った十字架に弟子達の心を備えようとされました。そして、教えることを教えた後、「祈り」をされました。それが17章の内容です。その「祈り」は3つに分けることができます。「1～5節が御自分のための祈り」、「6～19節が弟子達のための祈り」、「20～27節が全てのキリスト者のための祈り」です。今朝の箇所は、御自身のために祈っておられる箇所です。しかし御自身のために祈るといふことは、御自身の使命について祈るといふことですから、私達の救いについての祈りだと言えます。そのポイントは一言で言うと「永遠の命」です。「永遠の命」とはどのようなものなのか、イエス様の祈りを通して学びます。

1:「永遠の命」とは神とイエスを知ること

イエス様は1節で「時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください」(1)と祈られました。「ヨハネ福音書」において「栄光」というのは、「卑しい奉仕」を指します。そして「時が来ました」と言っておられますから、イエス様は十字架のことを祈っておられることが分かります。さらに2節で「それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちをあたえるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです」(2)と祈られます。「すべての人を支配する権威」というと、厳めしい感じがしますが、要するに「すべての人の救いがイエス様に懸かっている」ということです。ですから、イエス様は、祈りの初めに「全ての人の救いが私に懸かっているから、私に十字架の業をさせて下さい」と祈られたのです。つまり、「永遠の命」は、神様が計画され、イエス様が為し遂げて下さった十字架のゆえに、ただもらうものなのです。私達の方には何もない。信仰とは、「永遠の命」をただ「ありがとうございます」と言って受け取る手なのです。

しかし、その「永遠の命」を、私達はどのように理解すれば、あるいは受け取れば、良いのでしょうか。私達は「永遠の命」を「死んでも天国に行つて永遠に生きること」と理解していると思います。それで良いと思います。しかし、ここでイエス様は、「天国に行つて永遠に生きる」ということとは少し違うことを言われます。イエス様は「私に来る全ての人に永遠の命を与える

ために十字架に掛かります」と祈られた後で「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストを知ることです」(4)とされます。「『神と…イエス・キリストを知ること』が、そのまま永遠の命だ」と言われたのです。

以前、あるバイブル・スタディーの席上、「永遠の命」の話になった時に、1人の方が「永遠の命ですか。疲れそうですね」と言われました。「永遠の命」が、ただ永遠に生きることだとすれば、もっともな意見かも知れません。しかしこの「永遠」という言葉は、単に「いつまでも続く」ということではなく、「質的な完全さ」という意味を含む言葉です。つまり「永遠の」というのは「完全な」という意味になります。「完全な」という言葉が本当に当てはまるのは神以外にはありません。ですから「永遠の命を与える」という言葉は、「神の命を与える」と言い換えることができます。私達の立場から言うと「神の命を経験出来る」、「神との関係に生かされて生きて行ける」ということです。だからそれは、死んでからではない、今、ここから始まる「命」です。そして、私達が一旦、神との関係に入れば、たとえ死でさえも、それを壊すことはできない、死の壁を越えて神との関係、神の守りが続いて行くのです。いずれにしても「永遠の命」とは、今、ここで「私は永遠の命を持っている」と叫ぶことが出来るようなものなのです。

「そのためには、神様を、イエス様を知ることだ」とイエス様は言われます。では、神様を、イエス様を、どのように知ることが大切なのでしょう。それはイエス様の祈りのように、神様は、私達を救い、生かすために、さらには永遠に生かすために、イエス様を地に遣わし、十字架に架けて下さった、イエス様は、私のために、私の一切の罪を背負って十字架に架かって下さった、ということを知り、その神様とイエス様の愛を信じることです。

田原米子という方がおられます。彼女は高校3年の時に、愛する母親を亡くして、全てが空しくなり、電車に身を投げたのです。命だけは取り留めました。しかし両足と片手を失い、右手も3本の指しか残りませんでした。意識が戻って、それを知った彼女の唯一の希望は、痛み止めの睡眠薬を致死量まで溜め込むことでした。そんなある日、アメリカ人宣教師と日本人の青年がやって来ました。彼らは病室を何度も訪れて、讃美歌を歌い、聖書の御言葉を読んで彼女を励ましました。彼女は2人を拒否していましたが、ある日、2人が置いていったカセットテープを聞いたのです。「神様は、あなたにどんな欠点や弱い面があっても、そのままの姿で愛しているのです。そして、あなたを生かしたい、助けたい、幸せになってほしいと思われて、独り子イエス・キリストをお遣わしになったのです。キリストは、神様に背を向けていた私たちの罪の身代わりとなって、十字架の上で死んで下さいました。それほどまでに私たちを愛して下さいます」。彼女の心に、この言葉は響きました。「私を愛してくれている方がいる。キリストなら私の苦しみを分かって下さるかも知れない…キリストは、信じる者に新しい命を与えている…キリストが神かどうかは分からないけれど、この人たちの言うことに賭けてみよう」。彼女は、そう決心をしたのです。その時のことをこう振り返っています。「その晩は睡眠薬も飲まずにぐっすり眠ることが出来ました。本当に不思議でした。翌朝、見慣れていた周りの風景が輝いて見えました。右の手を見ると、指が3本しかないと思って絶望していたのに、3本も残っていることに気づきました…枕元にあった聖書をめくると、次の言葉が目飛び入りました。『だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました』(Ⅱコリント5:17)。確かに私は『新しく造られた者』だ、同じものを見ても違って見える…何故、昨日までの私とこんなにも違うのだろう。そうか、昨日、私は神

様に『助けて下さい』と祈ったんだ。やがてクリスチャンとなった彼女は、小学校、中学校、高校に招かれて「生きるって素晴らしい」という話をするようになりました。そして 2005 年、67 歳で天の御国に凱旋されました。彼女は、十字架を通して愛の神様を、イエス様を知り、信じたのです。そして「神の命」、「永遠の命」をもらったのです。闇の中で神の愛に引き上げられました。世に在っては、「神の命」、「永遠の命」の中に生かされ、そして神様との関係に守られて天の御国に帰って行かれたのです。十字架を通して、私達を死ぬほど愛して下さった神様を、イエス様を知り、その愛と救いを信じることで、誰でも「神の命」、「永遠の命」に与れるのです。

私は、このメッセージの準備のために読んだ 1 冊の本を通して、1 つの気づきを与えられました。5 節の「世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光」(5)という言葉から、著者は「イエスが世界の存在する前からおられたのだから、『旧約』の全ての言葉の背後にはイエスがおられる」と言うのです。そして「旧約聖書」の「哀歌」を引用していました。「主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めたましいに…主は、いつまでも見放してはおられない。たとえ悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない」(哀歌 3:25,31~33)。繰り返しますが、この愛の神様、愛のイエス様を知ること、そして何より、私達を救い、生かすために、十字架の救いの御業を為して下さった神様、イエス様を知ること、信じること、それによって私達は、「神の命」、「永遠の命」を、今、ここから持つのです。

2：「永遠の命」に生かされるために神とイエスを深く知ること

イエスは 4 節で「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを…成し遂げて…あなたの栄光を現しました」(4)と祈られましたが、実際、イエスが為さったことは、どういうことだったのでしょうか。「ある一人の人の生涯」という詩があります。「彼は…普通の人が偉大だと考えることは何一つしなかった…世間が彼を攻撃しはじめた時…友人たちも彼を見捨てた…かたちだけの裁判でなぶり物にされた。2 人の泥棒に挟まれ、その真ん中に釘で十字架に打ち付けられた…彼が死んだとき、死骸は知人の同情で他人の墓に葬られた」。イエスのご生涯は、「栄光」とは無関係なように見えます。どこに「神の栄光」が現れたのでしょうか。しかし「福音書」から浮かび上がって来ることは、イエスは神に忠実に生きられ、最後は神に忠実であろうとして十字架にまで架かれた、ということです。ある学者は言いました。「イエスは神の御心に従うことを生涯の目的としておられた」。つまりイエス様は、神に忠実に生きたことをもって、そして何よりも、神に忠実であろうとして十字架に架かれたことをもって「神の栄光を現した」と言われたのではないのでしょうか。もちろん、十字架は神の愛の現れの頂点です。イエスは十字架で、神が私達を愛しておられる、その愛を表し尽くして下さいました。やがて、十字架の栄光を認める人々が出て来て、教会が生まれます。しかし、その十字架も、神に忠実であろうとされた生き方の結果だったのです。イエス様も世に在って、人が経験するあらゆることを、苦難を、経験されたのです。「荒野の誘惑」のような信仰の戦いも経験されたでしょう。しかし、その中でも、神に忠実に生きられたのです。それがイエス様と神様との交わりを祝福したのです。

何を教えられるのでしょうか。「永遠の命」とは「神様とイエス様を知ることだ」と申し上げました。しかし聖書で「知る」と言う時、それは単に知識として知ることを言うものではありません。もっと深い知り方、それは神様を、イエス様を本気で信頼して生きて、そこから体得するような

知り方です。その意味で、イエス様のお姿に、私達は教えられるのです。

先日、私は、インターネットであるキリスト教番組を見ました。説教者は「ローマ人への手紙 8章 28節」を取り上げました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。そして「この『すべて』には、あなたの失敗も含まれています」と言いました。「アルファコース」でも聞いた言葉です。失敗さえも、神は益にして下さる。力強い、慰めのメッセージです。そうやって神の不思議を経験することも、「神の命」、「永遠の命」に生かされる恵みです。しかし説教者は続けて「だから、困難の中でも神様を忠実に信じて下さい。そうすれば、神は失敗さえも益に変えて、祝福に変えて下さいます」と言いました。私は、私達にとっての「忠実」の意味を改めて教えられた気がしました。「忠実」とはどのようなことか。それは、神の真実—(神は最善を為して下さるということ)—を信じることが難しいような状況の中で、それでも神が真実なお方であることを信じること、なお神様に信頼すること、それが「忠実」ということなのだと思います。そして、そのようにして私達は、神様を、イエス様を、深く知って行くのではないのでしょうか。イエス様がそうであられたように、それが私達と神様との関係を祝福するのではないのでしょうか。ある牧師が話しておられました。その方の友人は、大きな試練の中を「1コリント書」の言葉—{「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます」(1コリント 10:13)}—を握りしめて通って、神を経験して「神は本当に試練の中で支えて下さる方だった、神は真実な方だった」と、牧師に言われたそうです。その方はその後、「神は生きておられる」という確信に支えられて行ったことでしょう。

いずれにしても、そのように神様を、イエス様を深く知ることによって、私達も「神の命」、「永遠の命」の中を豊かに生かされて行くのではないのでしょうか。そして、やがて「神の命」、「永遠の命」に導かれて、神様との関係に守られて、天の御国に帰って行くのです。そこで祝福に包まれて、永遠に生きるのです。